

うらぼろスタイルのご紹介

vol. 6

前号では、浦幌に住み続けたいと願う子どもたち、若者たちのために、浦幌の強みを活かして創られた、5つの新しい起業・創業モデルのうち、1つ目の「1【起業・創業】うらぼろ起業創業ラボ（拠点）の構築」と、2つ目の「2【生産】浦幌の産業と町民を繋ぐ雇用創造く林業をモデルに」についてご紹介いたしました。本号では、引き続き、残り3つのチャレンジモデルについて、ご紹介いたします。



3【加工・販売】地域連携六次産業化くハマナスプロジェクトく

町の花であるハマナスを使って新たな町の特産品を創る取組です。ハマナスが選ばれた理由は、うらぼろスタイル教育の中で子どもたちから「ハマナスを使った特産品が欲しい!」「ハマナスを使った町おこしがないか!」といった声が多数出ており、子どもの想い実現ワークショップから提案されたものです。

まず新たな特産品を生み出すには原料がなくてはいけません。そこで、浦幌中学校に隣接する畑を農家さんからお借りし、「まちなか農園」と題し、ハマナスを栽培することになりました。

初年度（平成27年）と2年目に分けて、苗木の植え付けイベントを行いました。約300名の方にご参加いただき、合計1400株のハマナスの苗木を植え付けました。たくさんの方にハマナスをより身近に感じてもらえるよう現在でも、ハマナ



植樹会

スの写生会、花の摘み取りなどのイベントを継続しています。

ハマナスは収穫ができるようになるまで約3年かかります。その期間を使って、どのような特産品が良いのかを検討しました。成分調査や、町民の皆様からいただいたアン

ケートの結果、最もふさわしいとされたのが化粧品でした。その後、専門家のアドバイスをいただきながら試作品を作り、町内の女性の方に試供していただくことを何度も重ねました。



企画会議

まちなか農園のハマナスも収穫時期をおかえた2018年、コスメブランド「rosarugos

a (□サルゴサ) (ハマナスの学名) が完成しました。そして、多くの方の手によって完成した「rosarugosa」を世に届けるべく、ハマナスコスメの販売会社「株式会社ciokay (チオカイ)」を当時地域おこし協力隊としてプロジェクトを推進していた森健太さんが、起業しました。



(株) ciokay (チオカイ)
代表取締役 森健太さん

4【サービス】着地型観光の受け入れ

外からの旅行者や観光客を受け入れる「着地型観光」を推進するプロジェクトです。

浦幌の地域ポテンシャル(潜在力)には、豊かな自然や質の高い農林水産業が挙げられますが、これらは観光資源にもなり得ます。その浦幌の持つ観光資源を生かして、観光客や旅行者を受け入れる「着地型観光」の体制を整える必要があります。

浦幌には、農林漁家民泊を中心とした着地型観光の実績があります。それらのノウハウを活かした、「二次産業体験を軸とした観光ツアー」や、浦幌が全国・世界に誇る貴重な資源である「野鳥観察ツアー」、前述した「まちなか農園」と町花ハマナスを活用した「ハマナスの摘み取り



ツアーの様子

り・蒸留体験ツアー」など、地域資源を活用した着地型観光のプログラムを設計・実施する会社も設立されました。こちらも元地域おこし協力隊で、3年間プロジェクトを推進

してきた小松輝さんが2019年に設立した「株式会社リペリエンス」です。リペリエンスでは着地型観光の実施をさらに充実させていくため、旅行者が滞在することができるためのゲストハウスを創ることなども検討しているそうです。その他にも、小中学校の教育旅行や、一般の方の観光旅行のコーディネートも行っています。



(株)リペリエンス
代表取締役 小松輝さん

5【進路指導】子どもが夢を浦幌で実現できる指導体制〜うらスタ塾の構築〜

高校生などを対象に、キャリア教育を実施していくことを目指したプロジェクト構想です。

アンケート調査で当時の中学生にも将来の夢や就きたい職業についても答えてもらいました。すると、「この職業に就きたい」という

具体的な職業のイメージに加え、「この夢を浦幌で実現したい」という声も見られました。

中学校を卒業すると町外の高校へ進学するうらぼろの子どもたちは中学生段階で既に具体的な就業イメージを持ち、しかも「浦幌で」と考えてくれたのです。小中学校で実施されているうらぼろスタイル教育の成果であり、浦幌の貴重な財産です。その夢の実現を地域みんなで応援・サポートしていくことを目指しました。

しかし、町外の高校に通っている高校生たちが集まってももらえる体制づくりや、個々の興味・関心を把握し、それに見合ったプログラムを随時実施していくということなど、難しい課題はたくさんありました。

こうしたらよいのか、大人たちが悩んでいる間に、高校生たちが自らひとつのアクションを起こしてくれました。

次号はその高校生たちのアクションがきっかけで始まった「高校生つながり発展事業」についてご紹介いたします。今回も最後までお読みいただきありがとうございます。